

婦徳浄く嘉祥圓かなり

佐藤俊明

昨年六月十一日は方丈様のお母様とお会いした最後の日でした。

桐ヶ谷寺さんが富士山麓に別院「不二寺」を建立され、その本尊様の開眼法要のおこなわれたのがこの日でした。

黒田純方丈様は本尊釈迦牟尼仏奉祀の発願文の最後を次のように結んでおられます。

この功德回らし以て、

一には開創椽庵白純大和尚の為にし奉り上

慈衛の之恩に酬いんものなり

二には開基慈悲母黒田嘉刀自、乳哺養育の恩に

報じ、現当二世の安樂を祈誓し奉る
三には山門興隆、檀信帰崇、諸縁如意吉祥ならんことを

と。

この晴れがましい大法要の主賓であられるお母様ですが、決して表に出るようなことはなく、小さな体をより小さくしてかげにひそまれるような慎しみ深いお姿でおられたのがとても印象的でした。

帰途、横浜までクルマでごいっしよさせていだいたのですが、そのときも「善光寺をよろ

しく頼みます」と、まことに丁寧なお言葉をいただき、恐縮したのでした。このときはたいへんご元気でしたので、まだまだ大丈夫と思っていたのですが、秋ごろから健康をそこなわれ、十一月下旬、方丈様と共にお仏舎利奉戴のためタイに出かけるときは、果たして出発できるだろうかと案じられたのですが、さいわい予定通り日程を消化することができて胸をなでおろしたのでした。

年末には方丈様はたいへん心配なされ、万一年に備えられたのですが、ほんとうに強い生命力でよく頑張ってくれました。白純大和尚様の御命日まではと自らをあげましたのでありましょうが、とうとう力尽きて一月三十一日、遂に不帰の客となりました。

二月六日、肌寒い日でしたが、さいわい好天に恵まれ、大田原の光真寺様で御葬儀がおこなわれ、二千人の会葬者が別れを惜んで焼香され、

まことに御生前のお徳を偲ばせる一大セレモニーでした。私は方丈様との深い仏縁のおかげで尊茶師をつとめさせていただきました。尊茶師は大導師の脇役です。手短かに所懐の一端を述べたに過ぎませんが、二月八日、善光寺様での追悼会の際、導師をつとめさせていただきましたのでそのときの香語をしるして、お別れの言葉といたします。

安徳院殿嘉祥妙慶禅尼追悼会香語

成壽山頭・寂淨の光

心香一炷、靈堂に供う

音容、今日、何所の処にか在る

唯祈る、余慶、久しく昌昌ならんことを

恭しく惟れば、安徳院殿嘉祥妙慶禅尼 靈位

婦徳 自ら浄く 嘉祥はれ圓かなり。

事に処しては丹精、左之右之、陰徳を積む。

人に対しては懇切、茶裡飯裡、安祥を事とす。

夫師ふしの室しつに侍じしては辛酸しんさんを嘗なめ、念慮ねんりょ密密みつみつにして内助ないじょ息やむこと無し。

子息しそくの母ははとなりては寢食しんじよくを忘れ、心情しんじよう綿綿めんめんとして鞠育きよく嚴然げんぜんたり。

慈雨じうあすね普そく注ちういで潤うるおい余あり有り 六個ろつこの鉄漢てつかん、法ほう運うんいよいよ盛まかんなり。

心華しんげ恒ねに開ひらいて彩いろどり変かわらず 家風かふう穆穆ぼくぼくとして寺じ門もん永ながく全まつたしし。

此この日げん現ん董大どうだい圓武えんたけし志方しほう丈じよう 鴻大こうだいの恩徳おんとくに感かんじ、

報恩ほうおんの悃しんを披ひらき、諸山しよざんの耆宿しきじやく、有縁うえんの四衆ししゆを招しょう請しんし、追悼ついでう法会ほうえを嚴修げんしゆす。

因ちなみに野衲やのう、大圓方丈だいえんほうじようの清嘯せいしやくを蒙ごり、上具じようぐの筵えんに侍じす。

正与しやうよ麼もの時とき、妙慶みやうけい禪尼ぜんに、応供おおくう有伴うばんの消息しよくせき、如何いかが口唇こうしんを湿うるおさん

清せい白びやくの家風かふう、梅雪ばいせつの月つき

去来こらい跡あと無なく寒光かんこうを散せんず

